



Mの双眸

えむのそうぼう

あんぷらく
荒縄工房

S
M
小説

M の 双 眸

あんぷらぐ著

荒縄工房・発行



本作品はすべてフィクションであり、実在する人物・地名・団体とは一切関係ありません。また、特定の個人、団体、宗教、人種、性別などを誹謗中傷する意図はありません。

あんぷらぐ

S M雑誌に「仲ゆうじ」名でS M小説を執筆して作家活動をスタート。その後、編集の仕事に携わる。九〇年代よりネットで複数のペンネームで小説を執筆。二〇一一年「荒縄工房」より「あんぷらぐど」名義で独自の自虐的S M小説、伝奇S M小説などを発表。二〇一九年「あんぷらぐ」に改名。東京在住。

目次

攻撃の時	6
咲恵の穴	5 3
支配の洗礼	8 7
羞恥の準備	1 2 0
目覚め	1 5 3
羞恥の町	1 9 2
不倫の影	2 2 5
奴隷の誓い	2 5 7
奴隷の生活	2 9 1
淫汁の宿	3 2 6
鬼畜の宴	3 5 1

奥付 448
奴隸の務め 384

攻撃の時

姉はあつさりと結婚した。

ぼくから見れば、いらない兄貴ができたようなものだったけど。

結婚式はとても平凡で、結婚式場のチャペルを使って、披露宴もそこでした。父の会社の人たちが大勢やっつけてきて、手伝いをしたり場を盛り上げたりしてくれたので、父はそれなりに社会的に認められた存在なのだなということにはわかった。

だけど、姉は哀れだった。

義兄は大勢の仲間にもまれてるが、姉はひとりぼ

つちだった。姉には友だちと呼べるような人はいなかった。

父は泣いていた。そんな寂しげな姉が、感謝の手紙を読み上げたから。

ぼくは、正直、ふざけるなと思った。

父と姉との関係を知っていたから。

父はぼくが知らないと思っている。思ったがっている。だけど、ぼくは知ってる。なぜなら、姉がすべて教えてくれていたからだ。

「昨日ね、お父さん、お姉さんのこと、裸にして外に連れ出したの」

心の中に溜めておくには大きすぎることだったのだ

と思う。姉はぼくのことを、特別に好きということもないはずで、つまり、ぼくは姉の独り言を聞いてあげる役。

「首輪をつけられてね。恥ずかしいから、もじもじしていたら、お尻を叩かれるの。ただ叩かれるんじゃないの。鞭よ。鞭を使うの」

姉の言葉は重みにぼくは少しうろたえました。

「太くて重たい革の鞭。すごく痛い。手や拳とも違う。寝静まった夜だから、パチンってすごい音が響くの。だけど、そういう目に遭ってることが恥ずかしくて……。早く終わらせたいたいから、ちゃんと言うことを聞くようになる。四つん這いでお尻を振りながら商店

街まで歩いた」

このあたりには古い商店街がある。入り口付近にあった銀行がなくなつてマンションになつてしまつた。それがきつかけとなつたのか、いつきに工事中のマンションが増えている。それでなくてもシャツター通りだつたけど。古ぼけたアーケードだけはまだ残つている。

「そしてね、酔つ払いの男の人に……」

そう言いながら、姉はぼくに股間を押しつけてくる。恥ずかしそうに微笑む。温かくて柔らかくて、女臭い肉。

その指をズボンの中に入れてきた。

「その人、結局、こんなに固くはならなかったの」

「それで？」

「ねえ、もういいでしょ。ちようだい」

「だめだよ」

「意地悪しないで。お願いだから。お父さんとは違うわよね」

姉がぼくのを口に含む。その細い肩を抱いた。勉強机の中に半分、体を入れて、膝をついた姉が優しく愛撫してくれる。

もう一年ほど前から続いていたが、口だけだ。

「康ちゃんに妙な病気がうつったらいけないから。康ちゃんは、かわいい子と仲よくなつて普通に恋愛して

欲しいから。お口だけならいいでしょ？ 私、康太の子が見たいんだ。それだけが楽しみなんだもの」

その頃には父はどうなっているのだろう。

そして姉は……。

そんな心配をしていたら、父は強引に自分の部下と姉を結婚させたのだった。

「酔っ払いのおしっこを飲まされたわ」

ぼくのものを飲み干した姉が、頬を上気させて言った。

「あれ、つらいの」

おかげで果てたはずのぼくだったが、すぐにまたビクンと反応してしまった。

つらそうな彼女の目に刺激されたのだ。

滑らかで白い姉の喉。そこを汚らしいものが通り抜けたというのか。

「だめよ、おとなしくしてね」

姉はぼくのを赤ん坊のように撫でて、ズボンに戻す。

結婚したら、それもなくなるのだ、と残念だった。

ところが、結婚式のすぐあとに、義兄がぼくたちの家へ引越してきた。新婚旅行も新居もない。

姉とぼくの秘密の関係は、続くことになった。姉と父の関係も。

「彼と二人で、私を責めるの」

異常な同居だ。部屋数は足りていた。四階建ての、無理やりタテにしたような細長い鉄骨コンクリートの家。

祖父の代までここで機械部品の間屋をやっていた。ぼくが幼い頃に廃業し、そのとき隣接の倉庫兼ガレージはマンション建設のために売却していた。

残されたのは削り取られたような一角だけだ。

一階にはトラックが入ることのできる天井の高いスペースがあり、重い部品を荷台に載せたり降ろしたりするための電気チェンブロックも設置されていた。

そこにはフックが二つついている。

いまでは父が姉をそこに吊していた。

「嫌なら出て行つていいんだぞ」

それが父の口癖だ。

祖父は突然、肺がんで亡くなってしまった。サラリーマンだった父は後を継がず廃業した。祖母は痴呆になつて母が面倒を見ていたのだが、母は祖母より早く、大腸がんで亡くなつてしまった。

こういうことが小学生の頃に集中して起きた。姉に対する父の態度はそこから歪んだ。ちやうど姉の紗椰が初潮となつて、みんなと一緒に入る風呂を恥ずかしがるようになった頃だった。

どこかの施設に預けていた祖母がいつ亡くなったのか、はつきり覚えていない。父はその頃、かなりおか

しくなっていて、葬儀などを適当にしてみましたのではないかと思う。それよりも父は姉に夢中だったのだ。ぼくだけ置いて、姉に学校を休ませて旅行に行ったりもしていた。

異常な家族だ。だけど、その中にいる限り、それは異常だなんて決めつけられない。忌まわしいとか、うざったいと思ったりもした。父を殺してやろうかとか何度も計画した。

そんなぼくをなだめたのは、紗椰自身だった。

「くだらないことは考えないで、自分の人生を歩んでほしい。この家を出て行くの。約束してちょうだい」
三つしか違わないのに、父と関係を持つようになった

てから、姉は遥かに遠い存在になっていった。その距離を敏感に察知したのは彼女自身だった。嵐が来る前に船を港に繋ぐように、荒れかけていたぼくへ、彼女は手を差し伸べてくれた。

彼女は、自分がどんなことをさせられたり、しているかを話すようになった。聞くことでぼくはこの歪んだ空間で、なんとか繋ぎ止められていた。

「聞いてくれるだけでいいの。そうしないと、私、どうかなっちやいそうだから」

どうかなりそうなのは、ぼくではなかった。そうわかった瞬間から、心は冷めたが、父を突き放して見ることができるようになった。こう書くと簡単そうに見

えるけど、それまで長い期間、地獄のようだった。

それが遠ざかっていった。といつても真っ暗だったところが、一面火山灰に覆われたように、妙に明るいグレーに染まったようだった。

地獄にいたのはぼくではなくて、姉だった。それが理解できると、ぼくはむしろ姉のためにここに居なければいけないような気さえしてきた。灰色の荒野に彼女だけを置いていけない。

「お父さんを殺そうとか、思わないで。お願いだから」と頼まれた。

「だって、あいつが……」

「違うの。私が悪いの」

「そんなわけないじゃん」

「そうなの。私、好きなもの。こういうこと」

それが本心なのかどうかわからない。だけど、地獄から出られないと気付いたとき、地獄を好きになるしかないのかもしれない。暗黒には耐えられないが、グレーなら少し耐えられるのかもしれない。そこに棲む鬼を愛するようになるのかもしれない。

いまも目に焼き付いている。寝静まった明け方だったと思う。ブーンと虫のような音がして、どうしても気になつて階下へ降りた。

寝ぼけたぼくの目に飛び込んできたのは、チェーンブロックからぶら下がった白い肉塊だった。

縄でグルグル巻きにされて、逆さに吊された姉だった。

チェーンブロックの音が、たまたま三階の部屋まで響いたのだ。

「どうだ。苦しいか」

紗椰の顔の部分は父の股間にあたっていて、口の奥まで父の男根に貫かれているのがわかった。

半裸の父。汗が光る。

父親は姉の股間に、腕ほどもあるデイルドを突き立てていた。笑みか、苦悶か。よくわからない表情で、だけど熱心に父はその作業を続けた。

見てはいけないもの。

ぼくはすぐにベッドに逃げ帰った。

その光景は夢精の記憶と重なる。どっちが先かはわからないけど、とにかくぼくにとってとてつもない性の洗礼だった。

徐々に、あんなことをされている姉が、けなげにも父に従っている以上、介入できる立場じゃないんだと思うようになった。いや、それは紗椰のぼくへの奉仕と引き換えの妥協なのだけど……。

「まあ、紗椰さんて料理がお上手なのね」

咲恵という女性の声はぼくにとって、はじめて耳にしたときから、魅力的に感じられた。

新婚の部屋は二階。そこにはリビングと寝室がある。

かつて姉も住んでいた三階は、ぼくだけになってしまった。一人には十分すぎるスペースで、テレビを見たりゲームもできる。勉強もあるから、自室にいる時間 が長くなつてしまう。

父は四階に住んでいる。もつとも四階の半分はバルコニーで、バスルームと洗濯機置き場もあるのだ。一階の工場の名残をすべて改装すればもつと優雅に暮らせるのに、父は手を付けようとしなない。

外階段と小型の二人乗りエレベーターで行き来できる。外階段は裏側にあり、以前は倉庫兼車庫の敷地だったが、いまは大きなマンションの敷地となっていていかにもその価値を高めるために植えられた木々と駐

輪場のスレート屋根が見える。

二階はこれまでご飯を食べたりテレビを見たりするリビングダイニングキッチンだった。父と姉の関係ができてからは、食事だけの場所になった。

その二階から、久しぶりに明るい華やかな声が響いてきた。三階にいと筒抜けだ。

好奇心に突き動かされて、少し身だしなみを整えようと、さも関心なさそうに外階段で二階へ行った。

女の人に来ていた。いつもと違う匂いがした。

無関心を装って、いつもやっているように冷蔵庫のドアを開けた。

「あら、弟さんね？」

「ええ。康太。学生なの」

それが咲恵との出会いだった。

なにかの会合の帰りだろうか。姉も化粧をきちんとしてワンピースを着ていたので、いかにも若奥さんに見える。ただ、咲恵に比べると幼い。それが恥ずかしい。

これまで小さい頃から一緒だった。姉はどちらかといえはロリ系の顔立ちだ。声もそうだ。しかし、こうして咲恵という大人の女性と比較すると同じ年齢の女性には見えなかった。

咲恵は、ぼくにはまぶしかった。そのハスキーな声は新鮮だった。大人の女の香りに、酔った。

「康太。ご挨拶して。お友だちなものよ」

姉に友ができた。その事実。そして咲恵のまぶしさから逃れるように、頭を少し下げただけでアイスクリームとコーラを持って外階段へ出た。

追うように二人の明るい笑い声が聞こえてきた。冷たい外の空気に、自分が熱くなっていることを思い知らされた。

咲恵は、義兄の友人の妻。結婚式にも来ていたそうだが、まったく覚えていない。

その日からぼくはステキな夢を描くようになった。咲恵をぼくの奴隷にする。父が姉にしたように……。

そしてぼくはここから離れていくことができるだろ

奥付

お読みいただき、ありがとうございました。

二〇二二年六月刊行 第一版

著作権 あんぷらぐ（あんぷらぐど）（荒縄工房）

荒縄工房の情報は下記サイトへ

●ブログ「荒縄工房」

●ホームページ

●荒縄工房 SM研究室

●今日も上機嫌ってわけないだろ

コメント、メッセージ歓迎。ご意見、ご感想、ご提案など随時、ブログで受付中。